

ソ満国境と帝都防衛

栃木県 郡 司 登 久

私の父は日露戦争に従軍し背中に敵弾を受け、陸軍病院に永い期間入院したが半身不随となり、退院後高血圧で倒れ私が幼い時に亡くなり、母が大変苦勞しました。

子供は長女を頭に男子八人の十一人家族です。当時軍国主義たけなわの頃は、それこそ模範的な軍国家庭だったと思います。私は四男で、村の公民学校を卒業してすぐに宇都宮の福田屋呉服店に店員として働き、入営するまで勤めました。

長兄は農業をやっていましたが、私が昭和十四（一九三九）年三月九日入営したあと召集を受け、北支におりました。そして終戦間際に満州に行き、ソ連軍に抑留され、シベリアのバイカル湖西方のチェレンホーボの炭鉱で働いていましたが、昭和二十一年一月二十

一日、第五炭鉱病院で栄養失調で死亡したと通知がありました。

私は昭和十四年三月二日、大阪に集合、朝鮮の清津に上陸、軍用列車で豆満江の国境を通過、九日琿春に到着、琿春駐屯隊歩兵第八八連隊第一歩兵砲中隊に入隊しました。琿春はソ連、満州国、朝鮮の三つの国境が接する三角地帯で国境紛争の絶えない地帯であります。

果たして入隊後三カ月も経たない六月二日、ラクダ山事件が起き、ソ連兵と国境戦の争いで交戦し、軍曹一人が戦死し緊張しました。五月十二日、ノモンハン戦が始まり、私等も出動するかもしれず、七月には応急派兵が下令、「いつでも出動できるよう用意して待機せよ」と敵命され、九月まで緊張状態が続きました。

このような状態の中で初年兵教育が行われ、一期検閲は侘美浩大佐（のちのマレー上陸作戦で有名）が検閲官でした。中隊の装備は九四式連射口径三七ミリ、重量三二七キロ、射程六・七キロ砲が四門と四一式連

隊砲、口径七五ミリ重量五四〇キロ、射程六・三キロ砲が四門で、私は連射砲の四番でした。

この第八十八連隊の前身は、日本陸軍最初の機械化兵団である独立混成第一旅団の独立歩兵第一連隊であつて、昭和十三年十月に陣春駐屯隊編成に伴つて歩兵第八十八連隊と改称されたばかりで、私等は最初の初年兵でした。

古年兵も出身がばらばらです。初年兵も全国からの寄せ集めでした。ノモンハン事件に参加した十一年兵は全部戦死したそうで、生き残りの僅かな人も除隊した後でした。

関東軍名物のビンタは当然猛烈で、軍靴や上靴ビンタの嵐は初年兵を見舞いましたが、私は幸いにも戦友に恵まれ、内務班の先任上等兵が当たりましたので、夜の点呼後古年兵が「初年兵、整列！」と気合をかけると、戦友の先任上等兵が「郡司！これを洗面所で洗つてこい」とわざと私を逃がしてくれたので助かりました。

洗濯が終わつて班内に戻ると、他の初年兵は皆顔を

赤くはらしていました。内務班長の小松沢軍曹も私を可愛がってくれ、当番にしてくれたので助かりました。私が初年兵の中で一番助かつたと思つています。

大砲の運搬は馬を使いますから、当然馬手入れが初年兵の大事な仕事です。順番で既当番が一週間連続で回ってきます。朝、厩に飛んでいって寝薬の交換、蹄の手入れが仕事です。初めて馬に接する時は、恐ろしい思いでいっぱいです。馬は人を見分けるのが上手ですから初心者言うことを聞きません。蹴ったり、噛みついたり仕事になりません。しかし、やらないわけには参りませんから散々苦労しながら何とか手入れが出来ようになりました。

馬の他に兵器の手入れも大切です。人間よりも馬や兵器が優先される軍隊ですからやむをえません。

冬期演習は雪が三〇センチ以上も積もつた中で行われました。私は補助御者を命ぜられ、馬の手綱を持ちました。急な下り坂にかかり慎重に降りていくうち、雪に隠れた樹根に砲車の車輪があたり馬が暴れ、私が足を取られて転倒し砲車の前に倒れ込み、腰骨と腹の

境をひかれて失神してしまいました。耳元で細い声で「郡司、大丈夫かあ」がかすかに聞こえるようになりました。ここで死んでなるものと夢うつつに思いました。

しばらくして気がつき、班長が「郡司、大丈夫か」と心配してくれました。ちょうどその時、千人針を腹に巻いていたお陰で助かったんだと思いました。この事故で演習が一時中止になったのですが私が無事だと判り再開されました。完全防寒具を装備していたのでクッションにもなったのだと思います。

昭和十五年三月、初年兵が入り、私達は二年兵となり少しは楽になりました。階級も上等兵となり、連射砲射撃兵徽章を貰い、四月には支那事変の功により勲八等瑞宝章と金百円也を貰いました。従軍記章も一緒でした。

昭和十六年二月、十五年兵の初年兵が入り、三年兵になり神様扱いになります。七月には関特演で編成替えがあり、歩兵砲中隊が大隊になり、小松沢軍曹が本部隊になったので私も本部隊になりました。そして十

二月八日、太平洋戦争が始まり、初戦の大戦果は琿春にも伝わり大喜びでした。

そろそろ満期除隊の話も出始めましたが、南方行きの話もあり、一喜一憂の時期でした。

四月には駐屯隊も第七十一師団となり、五月には初年兵が入り、四年兵になり、いよいよ満期除隊かと思ったら連隊全部が内地帰還となり、五月六日に琿春出發となりました。

五月九日に大連に到着しましたが船がありません。約一カ月遅れるとのこと、ならば旅順でも見学しようかと旅順の古戦場巡りをして露軍の巨砲に吃驚し、父を含めて当時の兵隊の苦勞を目の当たりにして感動しました。よくこのような頑丈な陣地を奪ったものだと痛感した次第です。

ようやく大連出發、六月九日に神戸に上陸ですが、いま思い起こすと六月八日は太平洋ミッドウェー海戦で日本海軍全滅の悲運の日でした。昭和十七年六月十日、高崎の連隊に入り、十四日待望の満期除隊となりました。十三日付で兵長に昇進しました。

軍隊手帳によると、私の兵役は昭和十三年十二月に始まり、昭和十五年十二月一日満期のところ、陸軍省令第五一号により昭和十七年六月十四日まで在营延期となっています。知らぬ間に一年半延長になっていたのです。

満州にいる時、准尉さんが「郡司、満期になったらどうするんだ」と聞かれ「あてがないのなら七三一部隊はどうか」と勧められ、衛生部と機械部があるがどちらが良いかというので、機械を希望しておきました。

高崎から一旦家に帰り、すぐ満州に戻り、ハルビン憲兵隊を訪ね七三一部隊に行きたいというと直ちに自動車に乗せられ部隊まで送ってくれました。部隊に入るには関東軍司令官の証明書が無いと絶対入れないのですが、私の場合は事前に准尉さんから連絡があったのだと見えスムーズに入隊出来ました。

防疫給水部の機械部の旋盤係として石井部隊長の発明した石井式濾水機の製作に従事しました。身分は軍属でした。

部隊会報には衛生部員が細菌培養中に感染したことを裏付ける「○○軍属が○○炎で入院」等の記事が頻りに載りましたので、噂に聞いた研究の被害は事実なんだなあと思いました。一年くらいしてから妻を貰うことを理由に特別休暇を貰って帰国しました機会に、七三一部隊を退職して東京田端の軍需工場に転職しました。

昭和十九年四月十四日に教育警備召集を受け、東部二一六三部隊に入隊、続いて五月三十一日から六月六日まで前回と同様に教育警備召集を受け、東部二一六三部隊に入隊、その後米空軍がサイパン島に進出し本土空襲の恐れが大となった十月十六日から三日間、前回と同じ召集がありました。そのうち十一月に入ると、入隊先である第三特設警備隊工兵隊に召集され、空襲の際に避難路確保のため鉄道線路の両側五〇メートルの範囲内にある建物を強制的に取り壊すことになりました。なかには壊すにはもったいない立派な邸宅もありましたが壊してしまいました。

このような召集はますます頻繁になり、十一月だけ

でも四回もありました。十一月二十四日はB 29が東京を初空襲し、昭和二十年に入るとますます激しくなり、敵の航空母艦の艦載機が白昼堂々と帝都に焼夷弾の雨を浴びせる事態になりました。特に三月九日夜から十日にかけての大空襲は、B 29が三三四機も大挙来襲し市民十方を焼死せしめた大惨事でありました。

もちろん召集をうけ焼死者の遺体片付けをやりましたが、道路という道路は死体でいっぱいでは通れず、遺体を引っ張るとちぎれて内臓がドロッと流れ出、その臭気のひとつさにひるむほどでした。臭いが体にしみ付いて食事する気にもなれぬほどひどいものでした。

川や防火水槽に飛び込んで死んだ人は不思議にも皆が下向きに浮かんでいるのです。死体の中で住所氏名の布切れを胸にしている人は役所に知らせて広場に積み上げ、焼け残りの材木を積んで茶毘に付しました。

四月十三日は宮城の一部が焼失し、明治神宮も焼失しましたが、その時のB 29は実に三五一機に達したそうです。一家五人が頭を並べて防空壕の傍らで死んでいるのを見た時は、本当に可哀想でした。

私達は空襲警報が鳴ると奉公袋を手にして指定された部隊に集まるのです。小学校が兵舎でしたが、終戦近くなると小学校も焼け、部隊も自然消滅の形で消えてしまいました。装備は銃はもちろん無く、軍服を着用して鋸や掛矢が装備でした。B 29の爆撃はものすごく、支給された毛布を水に濡らして頭からかぶり火炎の中を逃げるのが精いっぱい、途中まで一緒だった戦友が直撃弾で一瞬のうちに消滅するのが日常でしたから、亡くなった人の処理は戦死扱いされたのかどうか今だに不明です。

私の兄弟も東京で働いていましたから、消息不明で心配していましたが、飛鳥山公園に避難した時に偶然にも会うことが出来、とても嬉しかったことを今でも思い出します。B 29の爆弾が基地に落ちて墓石がとんでもない方向の屋根の上に飛ばされているのを見ましたが、その妻さは、その場にいたものしか判らないと思います。

東京が丸焼けになり部隊も消滅し、仕方なく妻の実家に帰ってしばらくして終戦となりホッとしました。

東京で警備召集受けること実に九回に及びました。九人兄弟の長男が抑留、二男三男も戦後病死し、五男が逆縁で家を継ぎ、六男は内閣印刷局に勤め、恩欠者の賞状の印刷をやっていました。が最近定年退職しました。七、八男は健在です。歩兵第八十八連隊の戦友会の誘いを受けて参加しておりますが、隣の大隊の集まりです。

敗戦を外地で味わった悲惨さ

石川県 惣田 甚郎

私は、関東防衛軍経理部奉天出張所勤務であった昭和二十（一九四五）年八月九日、暗号書宰領の出張から帰ったが、もう夜になってしまった。出張予定がもう一日あるので翌日申告すればよいのであるが、ソ連軍が日ロ不可侵条約を無視して国境を越え満州領内に侵入してきたため早速経理部へ行った。

営門へ入ろうとしたらいきなり歩哨が誰何するので

びっくりして飛び上がりそうであった。私は何も思わず「俺だ、庶務の惣田だ」と言うと、歩哨から「ご苦労さん」の返事が返ってきた。完全軍装の物々しい姿であった。普断なら軽装しているのを、ソ連参戦によって厳重な警戒である。

八月十五日に「重大放送がある」ということで各々の事務所集合してラジオを聞いたが雑音ではっきりしない。誰言うともなく「終戦の玉音放送」であることが解ってきた。満州に居れば、敗戦など夢にも思わない状況であったのに、一方的にソ連軍が一日一日と奉天（今の瀋陽）へと迫って来る。

ソ連軍との戦闘準備で大忙しであった。司令部からの命令で、部隊の解散ということになった。そうなる。と陸軍官舎に居るのが危険なので、早速官舎に帰り、引越し準備をして、他の安全な場所へと移動した。

ソ連軍との交戦を覚悟で、各部隊の婦女子を日本の本土へ帰すため、釜山へ向け、八月十四日臨時列車（貨物列車）で奉天を出発させたが、北緯三十八度線で止められ平壤まで引き戻されて、婦女子が平壤の小